様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４４１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１０２７３

研究課題名（和文）遺伝的リスクがある乳がん女性のセルフ・トランセンデンスを促進する支援モデルの構築

研究課題名（英文）Development of a Support Model to Promote Self-Transcendence in Women with Breast Cancer at Genetic Risk

研究代表者
青木　早苗（AOKI, Sanae）

関西医科大学・看護学部・准教授

研究者番号：４０５１６１６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，遺伝リスクがある乳がん女性のセルフ・トランセンデンスを明らかにし，その支援を検討した．HBOCである乳がん女性のセルフ･トランセンデンスでは，【生き続けるための最善の方略を模索しながら，自己内対峙する】と【脈々と継承される血縁の繋がりを自覚する】能力を見いだす支援が重要である．また，BRCA1/2遺伝子変異陰性である乳がん女性のセルフ・トランセンデンスでは，【「がん家系」を意識して，家族でがんと対峙し続ける】能力を促進する支援が重要である．そして，VUSと判定された乳がん女性に対しては，検査段階からの十分な関わり，そして診断が変更される場合も考慮し，継続的な支援が重要である．

研究成果の学術的意義や社会的意義
遺伝的リスクがある乳がん女性は，様々な困難に直面する中で，セルフ・トランセンデンス（自身や環境との相互作用の中で，内的・外的境界を拡張しながら今を生きる意味や新たな見地を見出していく能力）により，生涯を通してその人らしく生きることに繋がると考えられる．本研究の結果は，遺伝的リスクがある乳がん女性のセルフ・トランセンデンスとは何かを明らかにしており，医療従事者，患者とその家族のみならず市民への情報提供として意義がある．また，看護師を含む医療チームは，このプロセスを促進するような支援を考えることができる．

研究成果の概要（英文）：This study aimed to identify self-transcendence in women with breast cancer who are at genetic risk and provide pertinent support for such women. In the self-transcendence of women with hereditary breast and ovarian cancer syndrome, “The ability to face oneself while seeking optimal strategies to continue living,” and “The ability to come to terms with blood conditions inherited from previous generations” is important. In the self-transcendence of women with breast cancer who are BRCA1/2 mutation-negative, it is important to support them to promote “The ability to continue to face cancer in the family with awareness of their cancer family tree.” For women with breast cancer with a clinically identified variant of unknown significance, it is important to be fully involved from the testing stage, and to provide ongoing support considering the possibility of a change in diagnosis.

研究分野：がん看護学

キーワード：遺伝的リスク　乳がん女性　セルフ・トランセンデンス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

1．研究開始当初の背景

乳がんは女性がん全体の 20%以上を占め，部位別罹患率第 1 位である．乳がんの 5～10%が遺伝性腫瘍であり，うち 30%程度に Breast cancer susceptibility gene1/2（以下 BRCA1/2）の生殖細胞系列変異が検出される[1)]．

この変異は，遺伝性乳がん卵巣がん症候群（Hereditary breast and ovarian cancer ：以下 HBOC）に見られる．BRCA1/2 遺伝子変異の有無を知ることは，発端者，その家系員にとって有効な情報である一方で，倫理的問題などデメリットな側面もある．

HBOC 診療において看護師は，遺伝的リスクアセスメントの段階から，家系を一単位として捉えて，長期間，家系の一生にわたり，彼らのタイミングに合わせて寄り添う存在として不可欠な存在である[2)]．また，乳がんの診断・治療が画期的に発展し，生存率が上昇している現状もあることから，診断・治療期のみならず，長期的な経過の中で，遺伝的リスクがある乳がんであることを本人が肯定的に捉え，乗り越えて生活していけるようにサポートしていくことは，看護師の重要な役割である．しかし，治療の場が外来へと移行してきており，遺伝的リスクがあると説明を受けた乳がん女性の心理的側面を看護師がタイムリーに把握して，支援できていないのが現状である．

HBOC 診療に関する国内の研究は，遺伝学検査を行うまでの診療体制をチームでどのように整備していくかという研究が多く，その後のフォローアップに関しては，症例研究に留まっていた．看護研究に至っては，遺伝的リスクがある乳がん女性が，そのことを受け止めながら乗り越えていく過程を支援する視点にたった研究は国内外でも皆無であった．

Reed P G[3)] は，ホメオダイナミックスの原理で現在の状況を乗り越えていく能力として，セルフ・トランセンデンスを用いている．セルフ・トランセンデンスは「様々な次元で自己の限界を拡張することができる能力」であり，人生における困難な出来事に直面したときに well-being と全体性の感覚を維持することを助ける．遺伝的リスクがあると説明を受けた乳がん女性は，多発・多重性や若年性の発症，自分だけでなく家系員の遺伝的リスクという問題など生涯に渡り困難な出来事に直面する機会が多い．本研究では，遺伝的リスクがある乳がん女性が困難な出来事を乗り越えていく過程で，セルフ・トランセンデンスを促進する支援ができれば，well-being な状態へと向かっていくと考え，この研究の着想に至った．

2．研究の目的

本研究では，遺伝的リスクがある乳がん女性のセルフ・トランセンデンスはどのようなものかを明らかにした上で，遺伝的リスクがある乳がん女性のセルフ・トランセンデンスを促進する支援モデルを検討することを目的とする．

（研究目的 1）

「セルフ・トランセンデンス」の概念分析を行い，その構成要素や定義を明らかする．

（研究目的 2）

HBOC である乳がん女性のセルフ・トランセンデンスとは，どのようなものであるかを明らかにし，セルフ・トランセンデンスを促進する支援を検討する．

（研究目的 3）

BRCA1/2 遺伝子変異が陰性であった乳がん女性のセルフ・トランセンデンスはどのようなものかを明らかにし，セルフ・トランセンデンスを促進する支援を検討する．

（研究目的 4）

遺伝学的検査の結果，Variant of unknown significance （以下 VUS）と判定された乳がん女性がどのような体験をしているのかを明らかにし，今後の支援を検討する．

3．研究の方法

（研究目的 1）について

（1）データ収集方法：海外文献は，PubMed，CINAHL を用いて 1998-2018 年の期間で，「Self-transcendence」のキーワードをもとに検索した結果，研究報告や総説を含め 505 文献が抽出された．その中から 27 文献を選択した．国内の文献は，医学中央雑誌，CiNii を用いて 1988-2018 年の期間で，「セルフ・トランセンデンス」，「トランセンデンス」で検索したが，該当文献はなかった．本研究で用いる概念として近い意味である「超越」で検索したところ 242 文献が抽出された．その中から 8 文献を分析対象とした．最終的に海外・国内 35 文献，セルフ・トランセンデンスに関連する図書 2 文献を追加し，37 文献を分析対象とした．

（2）分析方法：分析方法は，発展的な視点を基盤とした Rodgers(2000)の概念分析方法を参考に分析した．

（研究目的 2）について

（1）研究デザイン：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）を用いた質的研究

（2）研究対象者：病院で外来通院中，患者会や HBOC 当事者会に参加している HBOC である

乳がん女性で研究への参加同意が得られる人
（3）データ収集方法：データ収集期間は，2017 年 1 月～2019 年 5 月であった．データ収集は，インタビューガイドを用いて，半構造化面接を実施した．面接では，研究参加者がどのような困難に直面し，どのようにそれを克服したのかを自由に語って貰った．その中で，自己の生きる意味や目的，自己価値の変化はどのようなものだったのか，また，周りの環境からどのような影響を受けたのかなどを語ってもらった．
（4）データの分析：得られたデータは M-GTA の手法を用いて分析した．分析焦点者は，「HBOC である乳がん女性」とし，分析テーマは，「分析焦点者のセルフ・トランセンデンスはどのようなものであるか」とした．
（5）倫理的配慮：高知県立大学研究倫理委員会，研究協力施設の倫理審査委員会，患者会・当事者会の責任者の承認を得てから実施した．研究対象者には，研究の主旨・目的・方法，研究協力の任意性と撤回の自由，プライバシーの保護，データの管理，結果の公表等について文書を用いて説明し，同意書の署名を得た．利益相反はなし．

（研究目的 3）について
（1）研究デザイン：M-GTA を用いた質的研究
（2）研究対象者：病院で外来通院中，患者会参加している BRCA1/2 遺伝子変異が陰性であった乳がん女性で研究への参加同意が得られる人
（3）データ収集方法：データ収集期間は，2017 年 7 月～2018 年 8 月であった．データ収集は，インタビューガイドを用いて，半構造化面接を実施した．面接内容は（研究目的 2）と同様．
（4）データの分析：得られたデータは M-GTA の手法を用いて分析した．分析焦点者は，「BRCA1/2 遺伝子変異が陰性であった乳がん女性」とし，分析テーマは，「分析焦点者のセルフ・トランセンデンスはどのようなものであるか」とした．
（5）倫理的配慮：（研究目的 2）と同様．

（研究目的 4）について
（1）研究デザイン：質的記述研究
（2）研究対象者：HBOC の疑いがあり，遺伝学検査を受け，VUS と判定された人
（3）データ収集方法：データ収集はインタビューガイドを用いて，半構造化面接を実施した．面接では，乳がんと診断を受けてからの経過，遺伝学検査を受けた理由，遺伝学検査を受けてからどのような体験を経て今に至るのかを自由に語って貰った．
（4）データの分析：得られたデータは以下の手順で質的に分析を行った．
①逐語録を作成し，データを繰り返し読み全体像を把握した．
②文脈単位で「VUS と判定された乳がん女性の体験」で内容を取り出し，コード化を行い，共通点について分類した．
③複数のコードが集まったものに対してネーミングし，サブカテゴリー化した．
④カテゴリー間の類似性と相関性を考慮しながら分類し，抽象度をあげ，カテゴリー化した．
（5）倫理的配慮：高知県立大学研究倫理委員会，研究協力施設の倫理審査委員会の承認を得てから実施した．研究対象者には，研究の主旨・目的・方法，研究協力の任意性と撤回の自由，プライバシーの保護，データの管理，結果の公表等について文書を用いて説明し，同意書の署名を得た．利益相反はなし．

4．研究成果
（研究目的 1 について）
「セルフ・トランセンデンス」の概念分析を行った結果 5 つの属性，2 つの先行要件，5 つの帰結が抽出された（図 1）．
セルフ・トランセンデンスとは，「日常の生活の中でも起こり得るが，人が生命を脅かす体験や人生を変えるような出来事に直面したときに，自身や環境との相互作用の中で，内的・外的境界を拡張しながら今を生きる意味や新たな見地を見出していく能力」である．人間は，生命を脅かす状態や人生を変えるような状況に直面したときに，自己に立ち戻って内省するかまたは自然に自己理解を深め，新たな自己を発見したり個人内に深く意識を向けようとする．そして，そこから利他的に個人外へ深く意識を向けることにより，他者，自然や見えない力の存在とのつながりを感じるようになる．セルフ・トランセンデンスは，自己を自身，他者そして環境とつなぎ合わせながら相互に成長しあう特徴を持つ．その中で，過去の経験と未来の希望を用いて現在に意味を持たせたり，今まで生きてきた過程で大事にしてきた信念や価値を見直し，より広い視野での観点を見いだしたりすることになる．セルフ・トランセンデンスは well-being に不可欠であることも明らかとなり，看護はこのプロセスを促進するために重要な役割を担う．

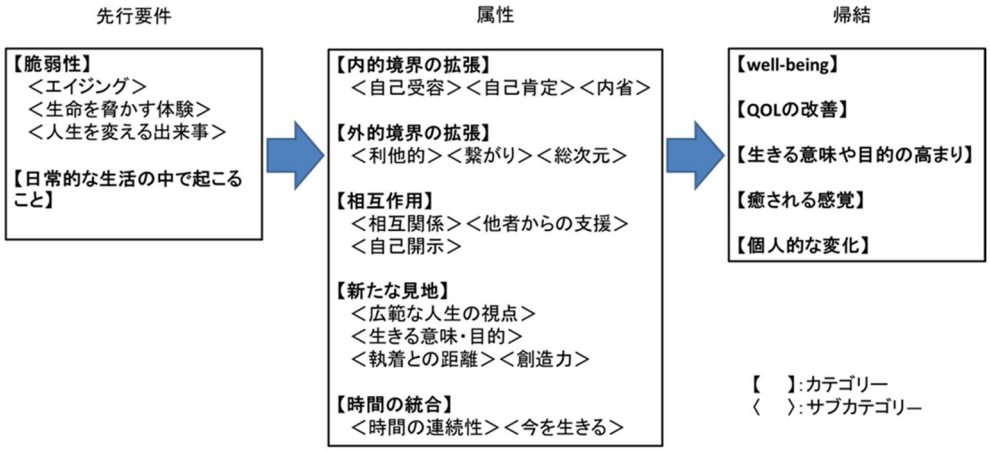

図1　セルフ・トランセンデンスの先行要件，属性，帰結

（研究目的 2 について）

（1）研究参加者の概要：30 歳～60 歳代の HBOC である乳がん女性 13 名

（2）HBOC である乳がん女性のセルフ・トランセンデンスは，7 つのカテゴリーで構成された（図 2）．HBOC である乳がん女性のセルフ・トランセンデンスは，【生き続けるために最善の方略を模索しながら，自己内対峙する】，【脈々と継承される血縁の繋がりを自覚する】が相互に影響しながら，【当事者として利他的になる】能力を推進していた．そして，【当事者として利他的になる】は，【支え，支え合う存在が在ることを認識する】に影響を受けながら，【HBOC に対する見解の多様性を受け入れる】，【囚われていた観念から脱皮し，「HBOC」と共生する】，【未来を惟い，今を生き抜く】という 3 つの能力を推進することが明らかになった．

本研究の結果から，HBOC である乳がん女性のセルフ・トランセンデンスの特徴として，HBOC であることは，普遍性，将来性，共有性を有するということであり，その自覚が，自分と繋がる大切な存在のためにも，自分を諦めずに「生きる」責任と使命に繋がり，【当事者として利他的になる】能力を推進することが考えられた．そして，当事者として利他的になるからこそ，HBOC に対する見解の多様性を受け入れ，HBOC と共生しながら今を生き抜く方向に推進していくことがこの研究の特徴であった．

看護師は基本的な遺伝看護の知識を持った上で，HBOC である乳がん女性と血縁者のゆらぎを察知し，支え，支え合う存在として，まずは【生き続けるための最善の方略を模索しながら，自己内対峙する】と【脈々と継承される血縁の繋がりを自覚する】能力を見いだす支援が重要であることが示唆された．

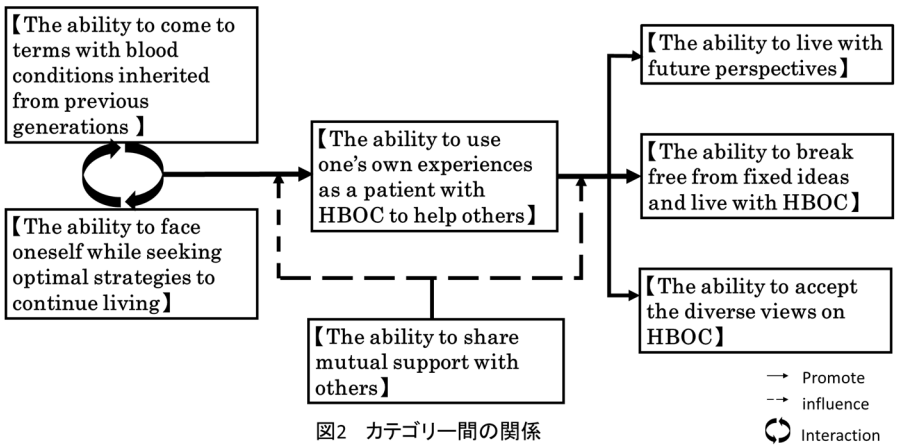

図2　カテゴリー間の関係

（研究目的 3 について）

（1）研究参加者の概要：30 歳～60 歳代の BRCA1/2 遺伝子変異が陰性であった乳がん女性 7 名

（2）BRCA1/2 遺伝子変異が陰性であった乳がん女性のセルフ・トランセンデンスは，4 つのカテゴリーで構成された（図 3）．BRCA1/2 遺伝子変異が陰性であった乳がん女性は，遺伝学検査を受けるにあたり，【自分だけでなく血縁者への影響も見据えて，HBOC の可能性と向き合う】能力を見いだしていた．遺伝学検査の結果開示後は，BRCA 遺伝子変異陰性に安堵感を感じ，【HBOC であることから一線を引き，限りある自分の人生を新たに紡ぐ】能力を見いだしていた．一方で，BRCA 遺伝子変異陰性であっても，「がん家系」である以上，家族で今後も予防的にがんと対峙しようとする【「がん家系」を意識して，家族でがんと対峙し続ける】能力を見いだしていた．【HBOC であることから一線を引き，限りある自分の人生を新たに紡ぐ】能力と【「が

ん家系」を意識して，家族でがんと対峙し続ける】能力は，「遺伝性疾患」を忌み嫌う日本の風潮や女性が「がん」を継承する悪いイメージを払拭したいなど，【社会の風潮を変えるために自分の経験を共有する】能力を推進していた．

本研究の結果から，BRCA1/2 遺伝子変異が陰性であった乳がん女性のセルフ・トランセンデンスの特徴として，BRCA1/2 遺伝子変異が陰性であったとしても，抗えない宿命を背負っている感覚を実感し，自分のみならず家族にとっても「がんは身近なもの」と認識することが，血縁者のみならず，【「がん家系」を意識して，家族でがんと対峙し続ける】能力を見いだしていることが考えられた．

看護師はまず，【自分だけでなく血縁者への影響も見据えて，HBOC の可能性と向き合う】能力を促進できるように関わることが重要である．そして，BRCA1/2 遺伝子変異が陰性であった場合，その後のフォローアップ体制がない現状であるが，今回の結果のプロセスを促進できるような外来等での関わりが重要であることが示唆された．

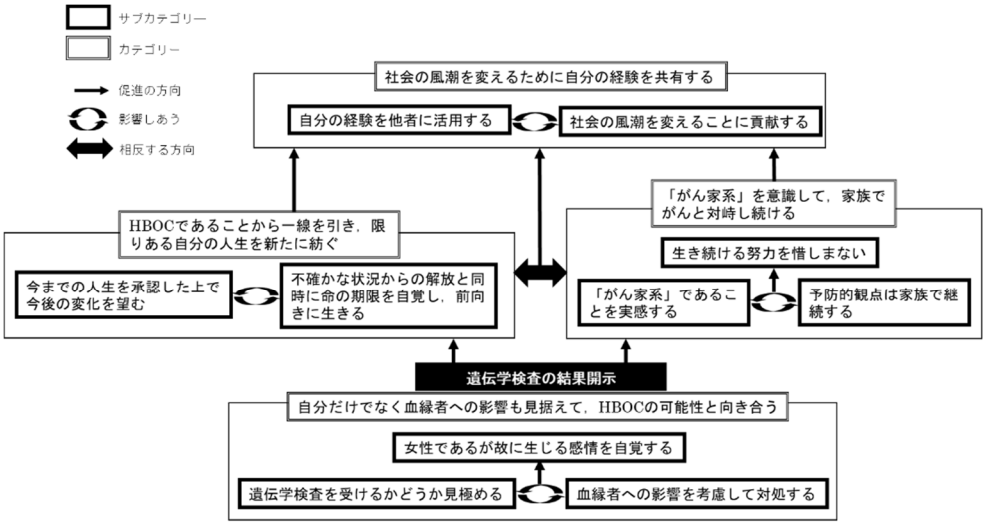

図３　カテゴリー間の関係

（研究目的 4 について）

（1）研究参加者の概要：30 代の VUS と判定された再発乳がん女性 1 名

（2）VUS と判定された再発乳がん女性の体験は，【遺伝性がんの可能性は考えていたが，思った以上に早くがんになり戸惑う】，【自分や他者のために遺伝学検査を受ける選択をする】，【血縁者のことを思うと結果がグレーであっても話にくい】，【死を意識する中で，大切なもの以外をそぎ落としていく感覚を持つ】，【不確かな状況の中でも生き続けたいと願う】，【結婚や出産に対する葛藤を経て，諦める】，【幾度となく辛い体験を乗り越え，前向きな自己を獲得する】，【心許せる人に相談する】の 9 つのカテゴリーで構成された．VUS と判定された再発乳がん女性は，自分は【遺伝性がんに対する抵抗感がないことを自覚する】が，【血縁者のことを思うと結果がグレーであっても話しにくい】と感じる体験をしていた．また，【結婚や出産に対する葛藤を経て，諦める】という辛い決断をする一方で，【幾度となく辛い体験を乗り越え，前向きな自己を獲得する】などの前向きな体験をしていた．検査段階からの十分な理解と選択，そして VUS と理解されていたバリアントが Pathogenic または Benign へと診断が変更される場合も十分に考慮し，継続的な支援が必要である．また，このケースの場合は，【幾度となく辛い体験を乗り越え，前向きな自己を獲得する】体験をしているが，結婚や出産することを否定的に捉えてしまえば，人生の意味や自己の価値などを見失わせてしまうような不快な感覚として知覚される可能性もある．VUS や再発がんという不確かな中でも，自分の人生の中で何を大切に選択していくのかの支援が必要である．

（引用文献）

1）Nakamura S,Takahasi M, Tozaki M, Nakayama T, Nomizu T, Miki Y et al. Prevalence and differentiation of hereditary breast cancer and ovarian cancers in Japan, Breast Cancer 2013; 22(5): 462-468.

2）赤間孝典,野水　整.家族性乳がん遺伝学検査に関する東北地方の受診者の反応,家族性腫瘍 2015;15(2):32-38.

3）Reed PG. Middle Range Theory of Nursing -Theory of Self-transcendence. Springer, New York, 2014, pp. 109-140.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 青木早苗，藤田佐和	４．巻 ４４
２．論文標題 セルフ・トランセンデンスの概念分析－がん看護における概念活用の有用性－	５．発行年 2018年
３．雑誌名 高知女子大学看護学会誌	６．最初と最後の頁 2－11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Sanae Aoki, Sawa Fujita
２．発表標題 Experience of a Female with Recurrent Breast Cancer and VUS (variant of unknown significance)
３．学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	藤田　佐和 (FUJITA Sawa) (80199322)	高知県立大学・看護学部・教授 (26401)	
研究分担者	杉本　健樹 (SUGIMOTO Takeki) (80216332)	高知大学・教育研究部医療学系臨床医学部門・准教授 (16401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関